

# 震災学習スタディツアー2025 活動報告書

支縁 ~ つなげる、つたえる、つづける



 敬愛大学 敬愛短期大学

教育の敬愛  
- 創立100周年 -

地域連携センター

(表紙)

仙台空港に隣接する、宮城県名取市下増田地区の「北釜防災公園」を訪れました。ここには一時避難場所となる、高さ約10mの「避難丘」が備えられています。東日本大震災の時は、この地で高さ6mの津波がやって来たのだそうです。この丘の上まで一気に駆け上がり、背後から迫る津波の恐ろしさを体感しました。津波の速度は、沿岸部では時速36km程と言われます。バイクなみの速度ですから、オリンピック代表選手(短距離走)でも逃げ切ることはできません。

表紙の上下2色の帯は、本学のスクールカラーである「敬愛レッド」「敬愛ブルー」です。

震災学習スタディツアー-2025 訪問地写真集



旧関上小学校のシンボルだった「ちびっ子丸」



関上わかば子ども園にて



名取市立関上保育所にて



関上プラザ(旧関上中学校慰霊碑)にて



北釜防災公園の避難丘を駆け上がる



尚綱学院大学TASKIの学生さんたちと合流



佐竹悦子さん(元関上保育所長)の講話



日和山で長沼俊幸さんの講話を聴く学生たち

震災学習スタディツアー2025 訪問地写真集



名取市震災メモリアル公園にて



長沼俊幸さんの講話「俺の家はここだった」



佐藤幸弘さんが「閑上たこ焼き」をお届けに



閑上の記憶で鳩風船にメッセージを寄せ書き



「学び舎ゆめの森」南郷市兵先生の講話



認定子ども園「学び舎ゆめの森」にて



「学び舎ゆめの森」を南郷校長先生のご案内で



大熊町役場の幾橋みね子さんの講話

# 震災学習スタディツアー2025 活動報告書

支縁 ~ つなげる、つたえる、つづける

Page	1	訪問地、行程
	3	団長総括
	5	参加学生のレポート
	33	引率者レポート
	35	参加者一覧



教育の敬愛  
- 創立100周年 -

## 敬愛大学 敬愛短期大学

地域連携センター



## 震災学習スタディツアー2025 行程

### 【1日目】2月4日(水)

7:15 稲毛駅(イオン稲毛店前) 集合

7:30 出発、千葉北IC～圏央道～友部SA、南相馬鹿島SA(昼食休憩)を経て、名取ICまで北上。

#### 14:00 閑上地区 現地踏査(1)

園訪問(パネルシアター披露等の交流を含む)

14:15～15:15 閑上わかばこども園(20名)

15:30～16:30 名取市閑上保育所(10名)

現地踏査

園訪問は学生全員が一斉に訪問することができないため、隣接する2ヶ所に分かれて実施。園訪問をしていないグループは、閑上プラザ(閑上中学校慰霊碑)～ちびっ子丸公園～あんどん松～閑上小中学校を実際に歩いて見学。

16:45 ホテルルートイン名取

到着後、夕食等自由行動

### 【2日目】2月5日(木)

8:30 出発

8:50 北釜地区震災メモリアルゾーン 見学

#### 9:35 閑上地区 現地踏査(2)

閑上公民館前で尚絅学院大学ボランティアチームTASKIの学生2名と合流

10:00～12:00 講話 佐竹悦子氏(「ゆりあげかもめ」代表、震災時閑上保育所長)

於:市営閑上中央第一住宅 C棟集会室

12:15～13:30 かわまちてらす閑上で昼食休憩

13:45～16:30 講話 長沼俊幸氏(閑上中央自治会長)

於:日和山、メモリアル公園、閑上の記憶

※閑上の記憶で、鳩風船へのメッセージ書き込み、閑上たこ焼きの試食

16:45 ホテルルートイン名取

到着後、夕食等自由行動

### 【3日目】2月6日(金)

8:00 出発、名取中央スマートICから常磐双葉ICまで南下。

車窓から、双葉町および大熊町(大野駅周辺)を見学

#### 10:00 大熊町立学び舎ゆめの森

10:00～12:00 南郷市兵校長・園長から説明の後、大学生は南郷校長の案内で施設・授業見学、短大生は渡辺副園長の案内で認定こども園の子どもたちと交流。

12:15～13:15 「おおくまーと」にて昼食休憩

13:30～14:30 講話 新保隆志氏(大熊町副町長)、幾橋みね子氏(大熊町教育総務課長)

15:00 出発、常磐富岡IC～友部SAを経て、千葉北ICまで南下。

バス車内では、恒例の感想大発表会を開催。

18:20 稲毛駅(イオン稲毛店前) 到着、解散。

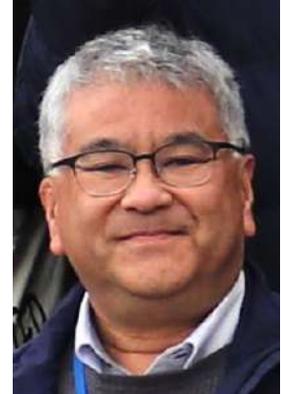
## 「つなげる、つたえる、つづける」を、「つなげる、つたえる、つづける」

団長 地域連携センター長 藤森孝幸

2011年度から本学が継続してきた宮城での震災学習は、今回で14回目を迎えました。今回の「震災学習スタディツアー」には、大学・短大から27名の学生が参加しました。まずは2泊3日の行程を共にした学生諸君に、心から感謝を伝えたいと思います。

発災から15年目の春に実施した今回のテーマは、「支縁～つなげる、つたえる、つづける」です。これには、本学の支援活動開始時にお力添えをいただいた尚絅学院大学（宮城県名取市）がボランティアの合言葉とされる「つなげる、つたえる、つづける」への敬意を込めています。同大学の地道な活動がなければ、本学の被災地訪問はとうに途絶えていたでしょう。「つなげる（繋）」「つたえる（伝）」「つづける（続）」という「3つのつ」は、今や本学のボランティアや地域活動においても、不可欠なキーワードです。

同時に、本学が宮城や福島で育ててきた方々との「縁」、そして参加者同士の「縁」を絶やさず繋いでいく決意を「支縁」という言葉に凝縮させました。この言葉は、私が2011年8月に石巻市でのボ



ランティアで共にした妃乃あんじさん（元宝塚歌劇団）による造語であり、本学の大切な理念でもあります。「最大のボランティアは忘れないこと」と説く彼女から贈られた「支援から支縁へ」という言葉は、今も私の支えです。今回の参加学生にも、その思いが届くことを願ってやみません。

今回はキャンパス統合により、同じ学び舎で過ごす大学と短大の学生が共に参加しました。学長の「短大の学びも活かせる研修に」との指針を受け、今年度は新たに保育所や認定こども園の訪問、当時の園長先生による講話等のプログラムを導入しました。保育とは縁遠い大学生も、短大生と共に手遊びやパネルシアターを通じた交流に励みました。卒業を控えた2年生の短大生9名にとっては、2年間の学びの集大成となったはずです。

学生のレポートを読み解くと、発災当時に彼らの多くが未就学児であったことがわかります。当時を「怖かった」と回想する学生も少なくなりました。機会がなければ記憶は薄れていくでしょう。しかし、多くの犠牲の上に生かされている私たちは、震災の記憶を風化させず語り継ぐ責任があります。本学が本ツアーで伝え続けているのは、「忘れなければ風化しない、風化させなければ次に活かせる」という至極シンプルな考え方です。

ところで、昨今では「サンテンイチイチ」という呼称が定着しましたが、私はこの言い方をあまり好みません。大切な日ではあっても、特別な日であってはならないと感じるからです。私たちは常に「次に災害が起きるであろう場所」で生活しています。3月11日を日常から切り離さないことが肝要です。大熊町と同じく全村避難を経験した福島県飯舘村では、この日を「あたりまえをありがたいと思う日」と定めています。「あたりまえ」と「ありがたい」は相反する意味を持つ言葉ですが、失われた日常を見つめ直した際、「あたりまえ」の尊さに気づかれたことが契機なのだそうです。

ここで、今回の参加者についても触れておきます。当初は30名（大学生21名、短大生9名）を予定していましたが、感染症等の影響で直前に断念した学生がおり、27名での出発となりました。短大1年生の不参加は、実習期間と重なったため致し方ありませんが、1～4年の全学年からの参加を次年度の課題とします。また、引率の清水一巳先生と酒井基宏先生には、専門的知見から学生の学びを深めるご助言をいただきました。多大なるお力添えに感謝いたします。

震災から15年が経過しましたが、まだゴールではありません。私たちが訪れた場所や伺ったお話は、過去の被災地の記録に留まりません。それは私たちが今いる街の「未来図」であり、私たちの住む場所は「未災地」に過ぎないのです。そして、今は「災害後」ではなく、「次の災害の直前」です。「敬天愛人」を掲げる本学は、これからも被災地に学び続け、「支縁」と「伝承」を続けていく使命があります。



結びに、これまでの多くのご縁に、改めて深い感謝と敬意を表します。

今回の企画実現にあたり、特に記して感謝申し上げます。

- ◆長沼俊幸様（閑上中央自治会 会長）
- ◆丹野祐子様、渡邊成一様（一般社団法人閑上の記憶）
- ◆佐竹悦子様（防災教育の市民団体「ゆりあげかもめ」 代表）
- ◆佐藤幸弘様（名取フードサービス）
- ◆南郷市兵様、渡辺滝様（大熊町立学び舎ゆめの森・大熊町立認定こども園学び舎ゆめの森）
- ◆新保隆志様（福島県大熊町副町長）
- ◆幾橋みね子様（福島県大熊町教育総務課長）
- ◆名取市立閑上保育所 様
- ◆学校法人わかば学園 閑上わかばこども園 様
- ◆学校法人尚絅学院 尚絅学院大学 様
- ◆株式会社ルートインジャパン 様
- ◆ビー・トランセホールディングス株式会社 様、株式会社西岬観光 様

## 震災学習スタディツアーに参加して学んだこと

現代こども学科 2年 岩瀬まどか

実際に津波が到達した地域を訪れ、当時の状況についてのお話を聞く中で、これまで当たり前にあった街や日常が、一瞬にしてすべて失われてしまうという震災の重さや怖さを、強く実感した3日間でした。映像や写真で見ただけでは分からなかった、現地の空気や静けさに触れることで、震災が人々の生活に与えた影響の大きさを、より身近なものとして感じる事ができたように思います。



スタディツアーの中で特に印象に残ったのは、閑上プラザに建てられている、当時犠牲になった中学生の名前が刻まれた慰霊碑です。一人ひとりに名前があり、日常があり、未来があったことを改めて考えさせられ、胸が締めつけられる思いがしました。また、通りすがりの小学生が、当時の状況をとても詳しく、そして自分の言葉で伝えてくれたことも強く心に残っています。自分たちが直接経験していない震災であっても、地域全体で記憶を受け継ぎ、決して忘れないように語り続けている姿から、震災と向き合う強さや大切さを学びました。



さらに、津波の際の避難場所となっている閑上小中学校では、校舎の目の前がすぐに開けた道になっていたり、誰でもすぐに鍵を開けて非常階段に立ち入れるよう工夫されていたりと、迅速に避難できる環境が整えられていました。こうした工夫から、次に災害が起こった時に一人でも多くの命を守るための準備が、特別なものではなく、普段の生活の中にしっかりと組み込まれていることを感じました。

そして、保育中に災害が起こった際には、子どもたちが少しでも安心して過ごすことができる環境を整えることが大切だと感じました。避難後や不安な状況の中でも、手遊びや絵本の読み聞かせなどを通して気持ちを落ち着かせ、子どもたちが安心できる関わりを心がけたいです。

今回の学びを忘れず、命を守る行動とともに、震災の記憶を次の世代へ伝えていける保育士を目指していきます。

### 【私の一枚】

2月5日に訪問した「閑上の記憶」での写真です。3月11日の慰霊祭で飛ばす鳩風船に、メッセージの寄せ書きをしました。空にいる大切な人や、東日本大震災で亡くなってしまった人たちに、私たちの思いや感謝、そして「忘れない」という気持ちが届くと嬉しいです。震災の記憶を風化させず、これからも受け継いでいきたいと改めて感じました。



## 震災学習スタディツアーに参加して

現代子ども学科 2年 佐藤綺蘭

今回の震災学習スタディツアーでは、2011年3月11日に起きた東日本大震災について学ぶことを目的に、宮城県を中心に訪れました。

1日目は名取市閑上の様子を実際に見て回りましたが、街はとても平らで、最初は震災の被害をあまり感じませんでした。しかし、先生方のお話を聞いて、この街が一度津波で流されてしまったことや大きな被害を受けたことを知り、見えている景色と過去の出来事の重さとの差に驚きました。

亡くなった子どもたちの名前が書かれた石碑に花を手向けました。石碑が黒いのは太陽の光や手のぬくもりで温まってほしいという思いから、角が丸いのは撫でやすいようにという思いからだと言いました。その話を聞いて、亡くなった子どもたちのことを今でも大切に想っている人たちの気持ちが伝わってきて、胸が熱くなりました。実際にその場所に立ち、話を聞いたことで、震災は教科書の中の出来事ではなく、今も続いている出来事なのだと強く感じました。将来保育者になる立場として、命の大切さや防災について子どもたちに伝えていくことの重要性を改めて考える機会になりました。

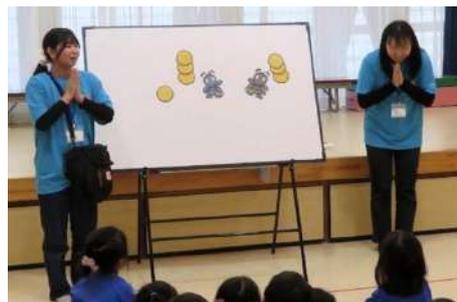


2日目に特に印象に残ったことは、震災が起きた当時の実際の映像を見たことと、鳩風船にメッセージを書いたことです。映像では、想像以上に大きな揺れや津波の様子、人々の混乱が映し出されていて、震災の怖さを改めて実感しました。ニュースで見るだけでは分からなかった現実が伝わってきました。また、鳩風船にメッセージを書くことで、亡くなった方や被災した方々への思いを自分なりに形にできた気がしました。

将来保育者になる立場として、子どもたちに命の大切さや防災の重要性を分かりやすく伝えていくことが大切だと感じました。子どもが安心して避難できるよう日頃から防災訓練を行ったり、絵本や遊びを通して災害について考える機会をつくらしたりする保育をしていきたいと思いました。

### 〔私の一枚〕

1日目に訪問した閑上保育所での活動の写真です。私たちはパネルシアターを担当し、大きくはっきりゆっくり話すことの大切さを学びました。他の学生の落ち着いた進め方で、子どもたちの反応が変わることも実感しました。自由遊びでは少人数で色塗りを行い、一人ひとりと丁寧に関わることで興味や気持ちを理解し、信頼関係づくりにつなげました。



## 震災学習スタディツアーに参加して学んだこと

現代こども学科 2年 勝瑞花歩

千葉県に住み、東日本大震災の記憶がほとんどない私にとって、震災はどこか遠い出来事で「自分には無関係なもの」だと感じていました。しかし、今回のスタディツアーを通して、震災の真の恐ろしさや、それがいつ身近に起こり得てもおかしくないという現実、そして自分自身の知識の浅さを痛感させられました。



配られた宮城県名取市閑上の震災資料や、佐竹悦子さん、長沼俊幸さんによる貴重な講話を通して、甚大な被害の大きさや緊迫した当時の状況を詳しく知ることができました。また、大熊町職員の幾橋みね子さんのお話からは、災害が物理的な破壊にとどまらず、いかに深く人の心を傷つけるものであるかを改めて学びました。

北釜地区震災メモリアルゾーンや「芽生えの塔」を訪れ、かつて人々の営みがあった場所が更地になっている光景や、想像を絶する津波の高さに触れ、震災の恐怖を肌で実感しました。現地での学びを経て、私はこの教訓を次世代の子どもたちはもちろん、大人に対しても「伝える存在」にならなければ



ならないと強く決意しました。帰宅後、家族や友人に学んだことを話した際、「千葉には津波は来ないから大丈夫」といった他人事のような発言が多く、周囲の危機意識の低さや記憶の風化に改めて気づかされたからです。

私は保育者として、また地域を支える一人として、今回のツアーで得た学びを日々の活動に活かしていきたいと考えています。大熊町立「学び舎 ゆめの森」で感じたように、無意識の固定概念に縛られず、自分の置かれた環境で今何ができるかを常に問い直す姿勢を持ちたいです。多様な場面を具体的に想定した実践的な避難訓練の実施など、現場の安全をより確かなものにするための提案を、職場の中で積極的に行っていきたいと思います。

### 〔私の一枚〕

2月5日に「閑上の記憶」にて鳩風船にメッセージを書いた時の写真です。ツアー1・2日目を通して少し参加者同志が打ち解けてきて、長沼さんや閑上たこ焼きの佐藤さん、尚絅学院大学のお二人、閑上の記憶のみなさんとも交流ができ、人と人の繋がりが強まっている瞬間が感じられる写真だと思います。



## 震災学習スタディツアーに参加して

現代子ども学科 2年 田野倉彩也菜

震災について様々な場所を訪ね、被災した方からお話を伺って、2つのことが特に印象に残りました。

1つ目は、被災した方の思いです。1日目に閑上中学校慰霊碑を、2日目に「閑上の記憶」を訪れました。慰霊碑は、たくさんの方に撫でてほしいという遺族の方の思いから、丸みを帯びた形をしていると伺いました。実際に私も慰霊碑に彫られた名前を撫で、遺族の方の我が子を思う温かさや、若くして亡くなった方がいるという悲しさの両方を感じました。「閑上の記憶」で拝見した動画では、遺族の方からお話があり、あの日のことをただ悲しい記憶として留めてしまうのではなく、今後起こりうる災害のために、そしてあの日この町に沢山の人が生き残ったことを忘れないために、慰霊碑が建立されたり、語り部活動が行われたりしているということを知りました。このような思いがあるからこそ、私たちは今回のツアーで震災・防災について学ぶことができているのだと感じ、その役割を人から人へ、今度は私たちが受け継いでいかなければいけないと考えました。



2つ目は防災意識の大切さです。2日目に佐竹悦子先生から、保育所での震災当日の行動や避難訓練の動きについて伺いました。お話を伺う中で、“もしも”のことがあった時のために避難経路・避難所を再確認し、そこが単に安全であるだけでなく、子どもたちが少しでも安心して過ごすことができる場所なのかを考え直したからこそ、54人の子どもの命を守ることができたのだと感じました。また、佐竹先生お一人ではなく、園の保育者全員と協力し

て考え、実際に形にしていってことで、震災当日も焦らず避難をすることができ、それが保育者にとっても子どもたちにとっても安心材料の一つになったのではないかと考えました。

このようなお話がある一方で、長沼さんが能登半島地震のボランティアに行った際、東日本大震災で学んだことが生かされていないと仰っていました。そのようなことを今後なくすためにも、経験を語り継いでいくことが大切だと感じました。

### 〔私の一枚〕

閑上の記憶で鳩風船にメッセージを書いている様子です。何を書くか迷っていたところ、「震災関係なく、亡くなった方へのメッセージでも良いですよ」と教えていただき、私が高校生時代に他界した年下の親戚にメッセージを書きました。今まで亡くした時の悲しみを言葉にすることが無かったので、今回改めて彼の死に向き合うことができました。



## 震災学習スタディツアーに参加して

現代こども学科 2年 長井優月

私はこの3日間で、自然災害や地域復興など、普段自ら考える機会の少ない事柄と向き合う貴重な経験をする事ができました。私の住んでいる地域は東日本大震災での被害が大きくなかったこともあり、震災前と環境はあまり変わっていません。ですが、宮城や福島を走るバスの車窓から外の風景を見ると、まだ震災当時のままの建物があったり、当時は建物があったらと思うられる跡地が多く見られたりしました。もちろん建て直して綺麗になっていた家や建物、現在建設中の病院などもありました。そういった風景から、15年間復興が続いている地域が今もあるということを知り、今の自分の生活が当たり前ではないということを実感しました。



震災当時、名取市閑上保育所の所長を務めていた佐竹さんの講話をお聞きました。4月から保育者になるため、もし自分が保育現場にいる時に震災が起きたらどうするのかを考えながら参加しました。震災が起きた際に適切な対応ができるのか不安もありましたが、震災が子どものトラウマにならないよう、子どもが不安にならないように対応することが保育者の役目なのだと学びになりました。



子どもが自分自身で命を守ることは難しいため、大人が事前から震災を想定した避難訓練を行っておくことも大切だと学ぶことができました。「園のマニュアルを読むこと」、まずはここを一人ひとりがしっかり行っておくことが大切だと思いました。「ここは津波がこない」、「ここは安全だよ」といった根拠のない考えは捨て、「備える」ことがどれだけ大切なのかを、実際に経験された方から直接お聞きすることができ、とても

学びになりました。

大熊町立学び舎ゆめの森も、見学させていただくことができました。昨年、学校で南郷先生から講話を受けており、学び舎ゆめの森に行ってみたく思っていたため、嬉しかったです。施設に入った瞬間から天井が高く、まるで図書館のように本が並んでいて、開放感のある空間に驚きました。千葉にはない新しい環境を見ることができ、またひとつ自分の引き出しが増えました。

### 〔私の一枚〕

この日は大熊町立学び舎ゆめの森を訪れ、短大のメンバーでパネルシアターを通して子どもたちと遊んだり、保育室の玩具と一緒に遊んだりしました。この写真はパネルシアターを終えたあとに子どもたちと挨拶をしている一枚です。子どもたちのキラキラした目と笑顔忘れられません。現場に出る前に貴重な経験が出来て嬉しかったです。



## 震災学習スタディツアーに参加して

現代こども学科 2年 中原未結

今回、東日本大震災の被災地である宮城県閑上と福島県大熊町を訪れました。これまで震災についてはニュースや映像で見聞きしてきましたが、実際にその場所に立ち、自分の目で町を見て話を聞くことで、初めて気づくことが多くありました。きれいに整備された街並みの中にも震災の記憶が残っており、時間が経っても震災は終わった出来事ではないと感じました。



2日目に閑上の町で長沼さんのお話を聞いたことが特に印象に残っています。実際の津波の高さを示す場所を目の前にしながら、「津波は来ないと思っていた」という当時の認識を知り、大きな衝撃を受けました。自分も同じ状況であればそう思っていたかもしれないと考え、思い込みの怖さを強く感じました。正しい知識を持ち、日頃から備えておくことの大切さを改めて学びました。

また、閑上中学校の慰霊碑に触れたことも心に残っています。慰霊碑の形や色、向きには意味が込められていると知り、多くの人の思いが今も大切にされていると感じました。その場で出会った子どもが震災について多くのことを知り、私たちに教えてくれたことにも驚きました。震災の記憶は大人だけでなく、子どもたちにも受け継がれているのだと実感



しました。

大熊町の「学び舎ゆめの森」を訪れたことも大きな学びとなりました。0歳児から中学3年生までが同じ場所で学び合い、活動内容が決まっても自分の好きなペースや場所で行う環境が整えられていました。その姿はとても新鮮であり、今しかできない学びの形であると感じました。校舎そのものにわくわくする工夫があるだけでなく、子どもたちの成長にわくわくできる環境であることがとても印象的でした。

震災は過去の出来事ではなく、これからも伝えていくべきものです。自分もいつ災害にあうかわかりません。今回見て、聞いて、感じたことを忘れず、今後の保育に活かしていきたいです。命を守ることの大切さや、人と人とのつながりの大切さを、子どもたちに伝えられる保育者になりたいです。

### 〔私の一枚〕

1日目に訪れた、閑上わかばこども園での写真です。パネルシアターやふれあい遊びの後、子どもたちとあやとりをしました。同じことを一緒に楽しむ中で、自然と距離が縮まったと思います。分からないことは子どもたちに教えてもらい、学生生活最後のボランティアで多くの子どもたちと関わることができた、大切な時間になったと感じました。



## 震災学習スタディツアーに参加して

現代子ども学科 2年 廣沢歩夢

今回の震災スタディツアーに参加し、私は多くの学びと気づきを得ることができました。私は震災当時、福島県いわき市に住んでおり、震災は決して遠い出来事ではなく、身近なものとして記憶に残っています。しかし今回、実際に被災された方々のお話を直接聞き、これまで自分は震災を「知っているつもり」でいただけだったのだと実感しました。自分の記憶だけでは分からなかった当時の状況や人々の思いに触れ、震災の重みを改めて考えるきっかけとなりました。

現地では、閉上の街について学び、当時保育所の所長であった方や、実際に被害に遭われた方のお話を聞く機会がありました。言葉の一つひとつから当時の状況や思いが伝わり、胸が締め付けられるような思いになりました。また、震災によって当たり前の日常が突然失われてしまう現実や、その中で懸命に生きてきた人々の姿に触れ、日常の尊さや人の強さについて深く考えさせられました。同時に、その経験を今も語り続けてくださることの意味や大切さも強く感じました。



また、保育所や学びの場でパネルシアターや手遊びの発表を行ったことで、子どもに伝えることの難しさや大切さを実感しました。どのようにすれば子どもが興味を持ち、楽しめるのかを考える中で、伝え方を工夫することの重要性を学びました。

さらに、このツアーを通して、仲間と同じ場所で同じ話を聞き、感じたことを共有できたことは、私にとって大きな意味を持つ時間でした。楽しいだけでなく、苦しい感情もありましたが、それを分かち合えたことで、一人では得られない深い学びにつながったと感じています。

この三日間を共に過ごせたこと自体が、かけがえのない経験となりました。この経験を忘れず、これからは保育者として、子ども一人ひとりの気持ちに寄り添いながら、命の大切さや人を思いやる心、そして震災の記憶を伝えていける存在でありたいと考えています。

### 〔私の一枚〕

この写真は、実際にこの高さまで津波が押し寄せたことを示しています。近くで見るとその高さの迫力が肌で感じられ、当時の恐怖や被害の大きさが伝わってきました。人々がどれほど必死に避難したかを想像すると胸が締め付けられました。このような形で、津波の恐ろしさを伝え続ける大切さも感じました。



## 震災学習スタディツアーに参加して

現代子ども学科 2年 藤森悠美

私は今回、初めて震災学習スタディツアーに参加しました。これまで東日本大震災については、発生日時などの断片的な知識しかありませんでしたが、実際に被災地を歩き、当時を知る方々の切実な声を聞いたことで、深い学びを得ることができました。

特に印象に残ったのは、名取市閑上の元保育所長・佐竹さんのお話です。極限の状況下で、子どもたちを不安にさせないよう絵本や手遊びを取り入れ、「平常保育」を貫いたというエピソードに感銘を受けました。非常時であっても子どもたちが落ち着いて過ごせたのは、日頃から保育者との間に確固たる信頼関係が築かれていたからこそだと感じました。このお話から、日々の丁寧な関わりの積み重ねが、有事の際に子どもたちの心を守る礎になるのだと学びました。

また、避難生活における「恐怖は人の判断力を奪う」という言葉も心に深く残っています。支援を待つだけでなく、「自分の命は自分で守り抜く」という自律した意識を持つこと。そのために、災害マニュアルの確認や家庭での備え、日々の整理整頓といった「日常の中の防災」を徹底する重要性を再認



識しました。

さらに長沼さんからは、「今まで津波が来なかったからここは大丈夫」という根拠のない言い伝えが、被害を拡大させたのだと伺いました。震災の記憶が薄れている人や、震災後に生まれた世代が増えていく中で、経験から得た教訓を「言葉」にして正しく伝え続けることは、今を生きる私たちの責務だと思います。

今回のツアーで受け取ったバトンを胸に、今後保育者として、子どもたちや周囲の人たちに、今回学んだことを伝え続け、一人でも多くの命を守る手助けをしていきたいと強く決意しています。

### 〔私の一枚〕

津波がどの高さまで来たのかが記されている北釜防災公園の写真です。実際にこの青色の看板の高さまで津波が来たのだと現地で目にすることで、その恐ろしさを実感しました。実際に登ってみると、自分の身長何倍もある高さであることが分かり、当たり前前の生活ができていることの大切さを感じました。また、災害はいつ起こるか分からないので、日々の訓練や備えをしっかりと行おうと改めて思い、この一枚を選びました。



## 震災の記憶と保育の学びをつなぐ3日間

現代子ども学科 2年 本澤七海

1日目は、閑上地区を歩きながら、慰霊碑や「ちびっ子丸」を見て回ったことが印象に残りました。閑上地区は津波により一度更地になっているため、綺麗すぎて違和感を覚えるほどでした。今まであったものが一瞬にして消えてしまう怖さや重さを感じました。閑上プラザに設置された慰霊碑には亡くなった中学生の名前が刻まれており、慰霊碑を撫でながら、こんなにも尊く若い命が奪われてしまったのかという想いを抱きました。同時に人の手や太陽の温もりを感じ、天国ではそれぞれ幸せであってほしいと願いました。



2日目は、長沼さんのお話が印象的でした。私はこれまでテレビでしか津波の様子を見たことがなく、どこか他人事のように捉えていた部分もあったと気づきました。それは同時に、震災の恐ろしさから目を背けたい気持ちの表れでもあったのだと思います。写真を見たり当時の様子を伺ったりする中で、怖さを感じるとともに「ここには来ないだろう」と根拠なく安心してしまう危険性を学びました。自分が直接体験していないことも、地域で協力し、正しい情報を引き継いでいくことの大切さを学びました。



3日目は、「学び舎ゆめの森」での研修が印象に残りました。私は保育を2年間学んできましたが、まだ固定観念が捨てきれない部分があると感じました。子ども主体の保育の大切さは理解していても、実践する難しさを感じていたからです。「ゆめの森」では、子どもが意欲的になれる環境づくりが大切にされており、最初から答えを示すのではなく、子どもが疑問を持てる環境を整えることが重視されていました。環境の持つ力の大きさを感じました。

今回の学びを通して、震災の記憶をこれからも伝え続け、忘れないようにしていきたいと思いました。自分や周囲の大切な命を守るためにも、震災時にどう行動するかを常に考え、日々の備えを大切にしていきたいです。また、この学びを自分のものにし、子どもたちがより良い環境で幸せに育っていける場をつくれる保育者になりたいです。

### 〔私の一枚〕

1日目に訪問した、閑上わかばこども園での一場面です。あやとりを教えてもらいました。子どもたちが器用にさまざまな形を作り、特にほうきを素早く作る姿に驚き、「作り方を教えて!」と声をかけると、笑顔で応じてくれました。隣にいた男の子も「教えて!」と興味津々でした。



## 震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 池田悠夏

今回、初めて震災スタディツアーに参加し、実際に大変な経験をされた方々のお話を直接聞くことができ、とても貴重な経験となりました。東日本大震災は、地震だけで終わるものではなく、津波や火災、厳しい寒さなどが長時間続く、想像以上に過酷な災害だったということが分かりました。

その中でも特に印象に残っているのは、当時、閑上保育所の所長をされていた佐竹さんのお話です。保育士や職員の方々が、子どもたちの命を守るだけでなく、子どもの心を守ることを大切にして行動していたことが強く心に残りました。不安や恐怖を感じる状況の中でも、歌や手遊びを取り入れ、できるだけ平常保育を続けることで、子どもたちが安心して過ごせるよう心がけをしていたことが、とても印象的でした。

また、自分の家族がいるにもかかわらず、地域のために働き続けた役場の職員の方々がいたからこそ、多くの人が避難所で生活することができていたのだと感じました。

さらに、防災マニュアルは作ったから大丈夫だと安心してしまうことが危険であるということも学びました。その地域や施設の状況に合わないマニュアルでは、救えたはずの命が救えなくなってしまうことがあると分かったからです。

このツアーを通して、教師の目線に立って災害について考えることができました。将来、小学校の教員になったら、非常時でも子どもたちの命と心に寄り添い、安心できる環境をつくれる教師になりたいと思いました。そのために、今回学んだことを生かし、さらに防災意識を高めていき、いざという時に落ち着いて行動できるようにしていきたいと思いました。そして、東日本大震災を知らない子どもたちへ、「つなげる・つたえる・つづける」という三つの「つ」を大切にしながら、学びを伝え続けていきたいです。



### 〔私の一枚〕

この写真は、北釜地区に建てられていた標柱とベンチの座板です。これは、津波で被災した、鈴木英二さん宅の親柱部材と染部材を加工し、再利用して作られたものです。流されてしまった建物の一部が、形を変えて今も人の役に立っていることから、震災の記憶をつなぐ大切さを感じました。



## あたりまえは、あたりまえじゃない

教育学部こども教育学科 2年 丹所紗英

今回の震災学習スタディツアーに参加して最も強く感じたのは、「あたりまえを見直すこと」の重要性です。

まず、閑上保育所の元所長である佐竹さんのお話が深く心に残りました。園には0歳児も在籍しており、徒歩での迅速な避難は困難であると想定し、事前に車両を利用した避難計画を立てていたといいます。その徹底した備えがあったからこそ、発災時も職員の方々は迷わずに動くことができました。このエピソードから、単にマニュアルを作成して安心するのではなく、「本当にこの方法で命を救えるのか」と常に疑い続ける姿勢の大切さを学びました。将来、教員になった際にも、配慮が必要な子どもを含む一人ひとりの状況を具体的に想定した備えが不可欠であると強く感じています。



また、長沼さんからは、「ここには津波は来ない」という根拠のない言い伝えが広まっていた事実が語られました。本来、地域の石碑には過去の災害の教訓が警告として刻まれていましたが、それが正しく伝承されなかったことが多くの犠牲につながったといいます。私の地元も海に近く、幼い頃から



「津波は来ない」と言われて育ってきましたが、自分の中にある「あたりまえ」を疑う視点の必要性を痛感しました。平穏な日常は、わずか一日で崩れることもあります。日常が続いていることの尊さに気づくと同時に、災害は決して特別な出来事ではなく、いつ自分の身に起きてもおかしくない現実なのだ」と再認識しました。

本ツアーでは、「繋げる」「伝える」「続ける」という三つの「つ」が掲げられていました。私はこれらに加え、自らの防災意識を不断に「強める」という決意を込めた「四つのつ」を、これからの人生の指針にしていきたいと考えています。

### 〔私の一枚〕

2月4日に名取市閑上地区を訪れた時の写真です。偶然現地で「閑上の記憶」の渡邊成一さんにお会いし、説明をしていただきました。閑上の方、そして敬愛の学生も学部や大学・短大の別なく繋がることができたことが印象に残っており、これを選びました。



## 震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 鶴岡正美

私は2月4日から6日までの二泊三日で、宮城県名取市閑上地区と福島県大熊町を訪れました。両地域は15年前の3月11日に発生した東日本大震災により、津波や原発事故の甚大な被害を受けた場所です。当時5歳だった私は保育園におり、昼食の時間だったことを覚えています。しかし、地震の揺れの大きさや恐怖の実感はなく、机の下に隠れた光景が断片的に残っているに過ぎません。震災を十分に理解していない世代の一人として、自らの足で現地に立ち、その真実を学びたいと考え、本ツアーに参加しました。

現地で強く感じたことは二つあります。

一つ目は、震災は決して過去の出来事ではなく、今なお続いているという現実です。今もなお帰還困難区域が残り、故郷に戻れない方々がいること、そして家族を亡くされた遺族の深い悲しみに触れ、震災の影響は現在進行形なのだと痛感しました。行方不明の方がいらっしやるという事実胸を締めつけられる思いがすると同時に、震災を風化させず、犠牲になられた方々への追悼の念を持ち続けることの重みを再認識しました。



二つ目は、自然災害への備えを常に見直し続ける重要性です。閑上保育所の元所長・佐竹さんのお話から、単に避難訓練やマニュアルをなぞるのではなく、状況に応じて柔軟に判断する力が必要だと学びました。想定が必ずしも現実と一致するとは限らないからこそ、日頃から防災を自分事として考え続ける姿勢が、最終的に命を左右するのだと感じました。

今回の学びを一過性の体験で終わらせるのではなく、将来教員となった際には、自分の言葉で子どもたちに震災の現実と命の尊さ、そして防災の重要性を伝えていきたいと強く決意しています。

### 〔私の一枚〕

この写真は、2月5日に訪問した、名取市閑上小中学校（義務教育学校）です。海に近い低地だったため、当時の閑上小学校、閑上中学校の周辺も浸水しています。ただし、学校では教職員がすぐに高い場所へ避難を判断し、児童生徒は屋上などへ避難し、在校していた子どもたちの命は守られたそうです。



## 震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 寺山ほのか

私は今回のスタディツアーで、宮城県名取市にある「閑上の記憶」を訪問しました。ここは、東日本大震災によって甚大な被害を受けた閑上地区の出来事や、人々の想いを未来へつなぐ震災伝承の場です。かつて5,000人以上の方が暮らしていたこの地域は、あの日、津波によって壊滅的な被害を受け、多くの尊い命が失われました。展示された写真や資料、そして被災された方々の証言を通して、その過酷な現実を学ぶ場所となっています。



今回、実際に津波を経験された長沼俊幸さんのお話を伺いました。津波が押し寄せる中、必死の思いで建物の屋根へと避難されたそうです。想像を絶する速さと高さで迫りくる水、一転してしまった景色、そして生死の境目で過ごした凍えるような時間。長沼さんの言葉から伝わる当時の切迫した状況と恐怖に、私は胸が締めつけられる思いがしました。

また、最愛のお子さんを亡くされた丹野祐子さんの歩みについても触れる機会がありました。丹野さんは深い悲しみの中にあっても、亡き子への想いを形にするため、空へ鳩風船を飛ばす取り組みを始め、現在も続けていらっしゃいます。その風船には「忘れない」という誓いや、命の尊さを伝えたいという強い願いが込められています。お話を伺い、震災を単なる「過去の出来事」として捉えるのではなく、そこには一人ひとりの人生があり、家族の数だけ深い想いがあるのだと痛感しました。



「閑上の記憶」は、被害の大きさを伝えるだけでなく、かつてそこに存在した人々の営みや、震災後も前を向いて歩もうとする姿を静かに語りかけている場所だと感じました。実際に現地でも声を聴くことで、教科書や映像だけでは決して届かない「現実の重み」を知ることができました。

今回の訪問を通じ、災害は決して遠い世界の出来事ではなく、いつ自分の身に降りかかるかわからないものなのだと強く実感しました。命を守る行動を日頃から問い続けること、そして震災の記憶を風化させず語り継いでいくことの大切さを、心に深く刻みました。

### 〔私の一枚〕

2月5日に訪れた名取市下増田の北釜地区にあるこの場所は、東日本大震災で被災した集落の記憶を伝えるために整備された、震災伝承の空間です。みんなで山の上まで走っている様子を写真に収めました。ここでは、実際に津波がどの高さまで来たかを確認できる場所があり、想像していたよりもすごく高さがあり、驚かされました。



## 震災学習スタディツアーに参加して

経済学部経済学科 2年 加藤羅偉

東日本大震災は、2011年3月11日14時46分に発生した東北地方太平洋沖地震と、それに伴う津波や原子力発電所事故などによる大規模な災害です。東日本各地を襲った激しい揺れや大津波、火災などにより、東北地方を中心に12都道府県で2万2,332名もの死者・行方不明者が発生した激甚災害です。



震災当時、私は幼稚園にいたため、あまり明確な記憶はありません。当時の先生が飴玉をくれた光景をうっすらと覚えている程度でしたが、今回の震災スタディツアーに参加したことで、改めてこの震災がいかに甚大な被害をもたらしたかを深く知ることができました。

特に印象的だったのは、2日目にお会いした長沼俊幸さんのお話です。「根拠がないにもかかわらず、『ここには津波が来たことがないから大丈夫だ』と昔から言い伝えられていた」という言葉が心に残っています。しかし実際には、日和山の麓に建つ記念碑に、昭和8年3月3日の三陸沖地震による津波被害の記憶が刻まれていました。そこには「地震の40分後に波高約3メートルの津波が押し寄せ、名取川を遡上して浸水家屋や漁船に被害が出た」と記されています。



東日本大震災の規模に比べれば小さかったとはいえ、過去にも確かに津波は来ていたのです。しかし、その事実は当時の人々に正しく伝承されていませんでした。もしこの教訓が「自分事」として伝え続けられていたら、東日本大震災での犠牲や被害を少しでも減らせたかもしれません。

「震災はやってこない」「自分たちは大丈夫」ということは決してないのだと、改めて身に染みて感じました。千葉に住んでいるから安全だと思いつくのではなく、いつ大地震が起きてもおかしくないという前提で備えることが不可欠です。ハザードマップの再確認や非常食の確保、そして居住地域の危険箇所の把握など、具体的な備えの重要性を再認識しました。

災害はいつ来るか分かりません。だからこそ、今回の学びを一過性のものにせず、家族や親戚にも伝えていくことで、いざという時に大切な人たちの命を守れるようにしていきたいと考えています。

### 【私の一枚】

2月5日に訪問した「閑上の記憶」の屋外に展示されているガードレールの写真です。震災の被害を伝えるものとして残されているそうです。写真を見ると、ガードレールが大きく変形しています。ガードレールをこれほど変形させる威力の津波が、ここ閑上地区に押し寄せたことがわかります。



## 震災学習スタディツアーに参加して

経済学部経済学科 2年 竹田百花

今回のスタディツアーでは、東日本大震災および原発事故からの復興過程を学ぶことを目的に、宮城県名取市閑上と福島県大熊町を訪問しました。実際に現地へ足を運ぶことで、資料や映像だけでは把握しきれない被害の規模や、震災後の町の変化、そして復興に向けた取り組みを具体的に理解することができました。また、現地の空間や施設を通して、被災の記憶を継承していくことの重要性についても深く考える機会となりました。



宮城県名取市閑上は、2011年3月11日の巨大津波によって市街地の大半が壊滅し、多くの尊い命が失われた場所です。一方、福島県大熊町は東京電力福島第一原子力発電所事故により全町避難を余儀なくされ、長期間にわたり人々の暮らしが途絶えるという、自然災害と原子力災害それぞれの深刻な被害を受けました。現在、両地域では防災集団移転やインフラ整備、震災の記憶を継承する施設の整備などを通して、住民の帰還や新たなまちづくりが進められています。

閑上地区・大熊町での学びから、今後特に重要だと感じたのは、過去の災害の記憶を単なる知識としてではなく、地域全体で継続的に共有していくことです。かつてこの地域には津波被害を伝える石碑が存在していたにもかかわらず、その意味が十分に語り継がれず、「津波は来ない」という根拠のない思い込みが被害の拡大につながってしまいました。この教訓は、災害の記憶が風化すれば、同じ過ちが繰り返される危険性があることを示しています。

したがって、地域の歴史や災害の実体験を防災教育の中に取り入れ、語り部の方々のお話や現地学習などを通して、実感を伴った学びとして伝えていくことが不可欠です。また、災害時には「想定外」が起こることを前提とし、判断に迷った場合は必ず避難するという行動原則を徹底する必要があります。日頃から地域の地形や避難経路を正しく理解し、自ら考えて行動できる力を養うことこそが、将来の被害を最小限に抑えることにつながると確信しています。



### 〔私の一枚〕

「閑上の記憶」という、震災の記憶といのちの大切さを伝える施設で撮った一枚です。津波の被害や当時の状況を展示し、いのちの大切さと教訓を後世に伝える場です。犠牲者への追悼の思いを込めて3月11日に放たれる鳩風船は、平和と再生への願いを象徴しています。



## 記憶の種を、明日の花へ

経済学部経済学科 3年 稲村優希

「ゆりあげかもめ」の佐竹悦子さんの講話を拝聴し、非常時における「判断の重要性」を改めて再認識しました。

震災当時、閑上保育所の所長を務められていた佐竹先生は、極限の状態での決断を強いられました。地震発生時、出先にいらっしゃった佐竹先生は、すぐさま保育所に引き返されました。そして余震が続く中、職員の方々に「逃げます」「車を持ってきてください」「小学校で会いましょう」と的確な指示を出し、園児を避難させたのです。しかし、避難に際して職員の自家用車を使用したことに対し、後日、一部から批判が寄せられたといえます。



命からがら小学校に到着したものの、気温は急激に下がり、園児たちは凍死の危険にさらされていました。佐竹先生はそこで、「建物ごと津波に飲まれるリスク」と「寒さで命を落とすリスク」を天秤にかける、あまりにも重い決断を下さなければなりません。最終的に、園児54名の命に責任を持つと決心し、建物の3階へ移動されました。避難先という非日常の中でも、園児に恐怖心を抱かせないよう歌や手遊びを取り入れ、努めて「日常の保育」を維持しようとした保育士さんたちの姿に、私は深く心を打たれました。



私は、あの日下された判断は非常に適切であったと確信しています。だからこそ、当時の緊迫した状況を顧みない批判の声に対し、疑問を抱かずにはられません。

地震の混乱の中で保育所へ引き返したのは、園児や職員の命、そして組織を預かる立場としての強い責任感があったからこそでしょう。また、送迎バスがない環境で、54名もの園児を迅速に避難させるには、車以外の手段があったのでしょうか。2キロ先の小学校まで、余震や火災、建物の倒壊といった二次災害のリスクがある中、幼い子どもたちを歩かせるのはあまりに困難です。あの日の勇気ある行動があったからこそ、園児と職員全員の命が守られたのだと強く感じます。

### 〔私の一枚〕

2月6日に訪問した大熊町の写真です。震災前は1万人以上が暮らす町でしたが、福島第一原発の事故により、全住民が住み慣れた町を離れることを余儀なくされました。

困難を乗り越えながら歩んできた大熊町には、いま新たな希望の光が差し込み、未来へ向かう確かな兆しが感じられます。



## 支縁 ～ つなげる、つたえる、つづける

経済学部経済学科 3年 芳賀寿也

今回で2回目の参加となった震災学習スタディツアーを通して、改めて「大切な命を守るために何が必要か」を考え抜く重要性に気づかされました。震災当時、地震だけでなく津波によって住宅街や公共施設が流され、住民の方々は想像を絶する不自由な生活を強いられました。

2日目にお話を伺った佐竹悦子さんの講話から学んだのは、「自分の命は自分で守る」という原則の重みです。これは、万が一の大地震や津波、土砂災害などの際に、まずは自らの安全確保を最優先に考えるべきであるという教訓です。自分自身の安全に確信が持てて初めて、他者への助けや安全な場所への誘導といった行動が可能になると考えられます。

また、日頃から学校や地域の避難訓練に真剣に参加することも欠かせません。これらは命に直結する活動であり、震災や防災に関する講演などに積極的に足を運び、知識を蓄えておくことに決して無駄はありません。震災はいつ何が起きてもおかしくないからこそ、現在の状況を過信せず、最悪の事態を乗り越えるための「事前の準備」が必要不可欠であると痛感しました。



現在住んでいる地域においても、避難場所の再確認や、周囲に危険な箇所がないかを改めて点検することが重要です。今の私たちが地域で取り組むべきことは、この「命を守る」という意識を周囲に伝えていくことではないでしょうか。佐竹さんのお話からは、大切な命を守り抜き、犠牲者を出さないためには、一人ひとりが当事者としての強い責任感を持つことが重要であると学びました。

災害を他人事と捉えず、自ら街の実地調査を行うなど、具体的な行動に移すことが必要です。災害はいつ、どこで、何時に起きるか予測できません。突然やってくる危機に対し、「自分に何ができるのか」を問い続け、避難場所の確保や備えを怠らない姿勢を、これからも大切にしていきたいと思います。



### 〔私の一枚〕

2月5日に訪問した閑上日和山での写真です。私たち敬愛大学・敬愛短期大学の学生27人で、閑上中央自治会長の長沼俊幸さんにお話を伺いました。東日本大震災が起きる前は、この閑上にも街があり、人々の生活があり、賑わいがあったそうですが、津波で全て失い、不自由な生活を強いられたのだそうです。



## 震災学習スタディツアーで学んだこと

国際学部国際学科 3年 佐伯桃子

災害は身近なものだと思っけていても、実際に被害に遭わなければ、その過酷さを真に想像することは難しいものです。どれほど想像を巡らせても、どこかで「他人事」として捉えてしまう部分があるのではないかと。今回の震災学習スタディツアーに参加する前の私は、正直に申し上げればそのように感じていました。東日本大震災当時、私は自宅で大きな揺れを感じましたが、母がそばにいてくれたこともあり、揺れが収まった後は普段通りに過ごさせていました。そのため、どこで何が起きていたのか、その実態を詳しくは知らずにいたのです。



今回のツアーの中で、私が最も衝撃を受けたのは、元閉上保育所所長の佐竹さんのお話でした。佐竹さんはかつて閉上保育所の職員としてキャリアをスタートさせ、市内の他の保育所を経て、最後に所長として再び閉上へ戻ってこられました。当時の避難マニュアルは、共通のフォーマットに従って作られたものであり、それに則って避難訓練も行われていました。

しかし佐竹さんは、高台にある「ゆりが丘保育所」と、海に近い「閉上保育所」で、全く同じ内容の訓練が行われていることに違和感を抱かれました。改めて地域の災害リスクを調べたところ、閉上には津波や竜巻の危険があることを再認識されたそうです。そこで佐竹さんは既存のマニュアルを疑い、職員一人ひとりに問いかけながら、実際に避難経路を歩いて危険箇所をチェックし、内容を抜本的に見直されました。

特に、マニュアルでは原則禁止とされていた「自家用車での避難」について、2キロメートルもの道のりを幼い子どもたちが歩くのは不可能だと判断し、車での避難を決断されていたことに驚きました。私はこれまで、マニュアルとは「その通りに従うべきもの」だと考えており、見直すという発想自体がありませんでした。閉上保育所で犠牲者が出なかったのは、マニュアルを疑い、現場に即した形に作り直した佐竹さんと、共に検証を重ねた職員の方々の主体的な行動があったからこそだと強く実感しました。



### 〔私の一枚〕

北釜防災公園の避難丘です。実際に10mの高さを駆け上がると、仙台空港を見下ろすことができました。公園がある場所には、震災前は住宅や生活の場があったそうです。空港の反対側を見ると海が見えます。このすぐ近くの海から、津波はやって来ました。



## 震災学習スタディツアーに参加して

国際学部国際学科 3年 松島奈津葵

東日本大震災から15年が経過した被災地は、一体どのようになっているのか。現地を訪れてすぐに、私は自分の考えがいかに浅く、狭いものであったかを痛感しました。私は、15年も経てば新しい建物が並び、震災前とほとんど変わらない光景が戻っているものだと思い込んでいたのです。しかし実際には、何十年、何百年とかけて形作られてきた街は、たった15年では元通りにはならないという厳しい現実を目の当たりにしました。形ある建造物でさえそうなのですから、そこで日常生活を送っていた人々の心の再生や生活の立て直しはより深刻であり、15年という時間は、平穏を取り戻すにはあまりに短いものだったのではないのでしょうか。



津波の被害を受けた宮城県名取市閉上には、新たな小中学校が建設されていました。その校舎は、公立の学校とは思えないほど美しくデザイン性が高いだけでなく、何より地震や津波への対策が徹底されていました。学校が災害時の避難所としての使命を背負っていることがよく理解でき、再びこの土地で暮らす人々の安心のために心血を注いで造られたものだと分かりました。また、特に衝撃を受



けたのは、現在は遊具が充実した広い公園になっている場所が、震災前は家や店がぎっしりと立ち並ぶ賑やかな街だったと知ったときです。説明を受けなければ、そこにかつての営みがあったことすら想像できないほど、景色は一変していました。

さらに今回のツアーでは、実際の津波の高さや当時の避難所の過酷さ、プライバシーのない生活の苦しみ、そして人間が極限まで追い込まれた時の心理など、これまで全く知らなかった多くの真実を学ぶことができました。これらの教訓は、決して過去の出来事として風化させてはならないものです。今回の震災学習スタディツアーに参加し、現地の方々の生の声に触れ、未来へ繋ぐべき大切な視点を得られたことは、私にとって何物にも代えがたい経験となりました。

### 【私の一枚】

2月6日に、福島県大熊町の学び舎ゆめの森を見学させていただいたときの写真です。私たち敬愛大学の学生は、校長先生の案内で見学をしました。学び舎ゆめの森は、従来の学校とは異なる部分的が多く、新しい形の学校でした。0歳から9年生まで、保育園から中学校までを一つの施設とした学校で、幅広い年齢の子どもたちが学ぶ場所でした。



## 震災学習スタディツアーに参加して

国際学部国際学科 3年 松原にな

東日本大震災がもたらした被害や恐怖だけでなく、その後の生活の変化や復興への歩みを深く学ぶことができた、非常に充実した三日間でした。私自身は当時の記憶がほとんどなく、実際にその震災を体験したとは言えません。しかし、現地の方々の切実なお話を伺う中で、震災の記憶を正しく語り継いでいくことこそが、これからの災害対策において極めて重要であると肌で実感しました。



震災の映像や講話の中で特に印象に残ったのは、「想定外」という言葉の危うさです。「ここには津波は来ない」という根拠のない伝承や、想定を大幅に上回る津波の高さ、避難所体制の不備など、多くの課題が「想定外」として片付けられてきました。しかし実際には、先人が残した石碑の教訓を謙虚に受け止め、平時から万全な備えを整えていれば、防げた被害も少なくなかったはずです。災害大国である日本において、過去の痛ましい経験を教訓として語り継ぎ、同じ過ちを繰り返さないことの重みを改めて痛感しました。

また、当時の保育所長であった佐竹さんのお話を伺い、子どもの命を預かる責任の重さを深く考えさせられました。迅速な避難判断を下すだけでなく、子どもたちにトラウマを植え付けないよう細心の配慮を持って行動することは、想像を絶する困難を伴うものです。極限状態においては誰もが自分のことで精一杯になり、「誰かに助けてもらうこと」を前提にしている、大切な命を守り抜くことはできません。

まずは「自分の命は自分で守る」という原則を忘れず、日頃からマニュアルの見直しや、避難訓練への主体的な参加を心掛けていきたいです。



### 〔私の一枚〕

2月5日に訪問した佐竹悦子さん（防災教育の市民団体「ゆりあげかもめ」会長）のお話を聴いている写真です。復興公営住宅の最上階に写真のような集会所があり、そこで私たち敬愛の学生と尚絅学院大学の学生と一緒に講話を聞かせていただいた様子が映っています。



## 震災学習スタディツアーに参加して

国際学部国際学科 3年 安山ひとみ

東日本大震災が発生した2011年3月11日、私は幼稚園の年長組でした。当時の記憶は断片的なものしかありません。しかし、だからこそ「現地に足を運び、自らの目で震災について学びたい」と強く思い、友人たちとともにこのスタディツアーへの参加を申し込みました。

初めてこのツアーに参加し、佐竹悦子さんや長沼俊幸さんなど、実際に震災を経験された方々のお話を直接伺うことで、「災害は決して他人事ではなく、いつ自分の身に起きてもおかしくない現実なのだ」ということを肌で実感しました。

特に心に深く刻まれたのは、佐竹悦子さんがおっしゃっていた「災害は一つではない」「自分の家は大丈夫だと思いたまえないこと」という言葉です。震災とは単なる津波の被害だけを指すのではなく、激しい揺れや厳しい寒さ、火災といった、あらゆる危険が連鎖的に襲いかかってくる多重災害なのだということを学ばせていただきました。

また、災害は人々の生活だけでなく、心までも翻弄し、余裕を奪い去ってしまうという過酷な側面も知りました。周囲への気遣いができなくなるほどの極限状態が生まれるからこそ、「誰かに助けてもらうこと」を前提にするのではなく、「まずは自分の身を自分で守り抜く」という



自立した意識が不可欠だと強く感じました。そのためには、日頃から防災を自分事として考え、即座に行動できる準備を整えておくこと、そして「判断を下す一秒」の重みを決して忘れないことの大切さを学びました。

それだけではなく、震災について学んだことや感じたことを、私たち若い世代が周囲の人々へ語り継いでいくことの重要性も痛感しています。今回のスタディツアーを通じて、体験された方々の切実な思いを受け取った私たちが、高い防災意識を持ち続けること。それこそが、これから起きるかもしれない災害の被害を最小限に抑えることに繋がるのだと確信しています。



### 〔私の一枚〕

この写真は、ツアー初日の夕食にいただいた牛タン定食のものです。実は、人生で初めての牛タンでした。実際に現地で味わった牛タンは肉厚でしたが、とても柔らかく美味しかったです。多くの方に会ったりお話を聞いたりするスタディツアーの中で、思い出の一つになりました。



## 震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 3年 齊田直大

本スタディツアーでは、宮城県名取市閑上地区および福島県大熊町を訪れ、東日本大震災の被災地の現状と復興の歩みを学びました。閑上では、北釜地区震災メモリアルゾーンや日和山、メモリアル公園を巡り、津波被害の凄まじさと、地域の方々が積み重ねてきた追悼と再生の営みに触れました。佐竹悦子さんや長沼俊幸さんの講話からは、極限状態における保育現場の葛藤や地域コミュニティの苦悩、そして人と人のつながりの重要性を深く学ばせていただきました。「閑上の記憶」での見学やメッセージ記入を通じ、記憶を次世代へ継承する主体としての自覚も芽生えました。



大熊町では、「学び舎ゆめの森」を訪問し、原発事故による長期避難と地域再生の課題について考えました。帰還が進む一方で、人口減少や産業再建など今なお山積する課題を目の当たりにし、復興とは単なるインフラの復旧ではなく、そこに暮らす人々の生活習慣や尊厳そのものを回復する過程であると強く実感しました。

今回の学びを通して痛感したのは、「知ること」と「引き受けること」は異なるという点です。現地を歩き、当事者の語りを直接聴いたことで、震災は統計や映像の中の出来事ではなく、今も続く切実な生活の現実であると理解しました。同時に、語りを受け取った私自身も、その記憶を未来へとつなぐ責任の一端を担っているのだと気づかされました。復興とは行政や専門家だけの課題ではなく、外部にいる私たちがどのように関心を持ち、学び、語り続けるのかという「関わり方」の姿勢に支えられていると考えます。

だからこそ、今回の経験を一過性の感想で終わらせるのではなく、自らの生き方や将来の進路とも分かちがたく結びつけながら、震災を生涯の「自分事」として捉え、問い続けていきたいと決意しています。



### 〔私の一枚〕

これは、2月5日に訪れた閑上公民館近くにあるモニュメントです。

東日本大震災の被災地の瓦礫などを用いて制作されたモニュメントであり、二人の少年少女や木々、閑上中学校の校章が色鮮やかに描かれ、復興への願いが込められています。



## 震災学習スタディツアーで学んだこと

教育学部こども教育学科 3年 櫻井友駿

人生で2度目となる震災学習スタディツアーに参加しました。昨年の参加時はお話を伺うだけで精一杯でしたが、今年は一つひとつのプログラムに、より主体的に向き合うことができたと感じています。また、今回は一人の友人と共に参加しましたが、今回はさらに二人が加わり、気心の知れた4人組での参加となったことも心強かったです。

今回のツアーの中で、特に心に刻まれたことが2つあります。

1つ目は、現地の方々による講話です。佐竹さんや長沼さんの生の声を聴くことで、当時の凄まじい現場の様子や、その後の懸命な活動について深く知ることができました。佐竹さんのお話では、保育現場での緊迫した対応や、預かっている子どもたちへの接し方を伺い、状況に応じて下された柔軟な判断に深い感銘を受けました。もし私がその場にいたら、動揺して適切な指示を出せなかったかもしれません。有事の際、佐竹さんのように冷静かつ柔軟に動ける人間になりたいと強く感じました。



長沼さんの講話は2回目でしたが、今回も深く心に響く内容でした。特に、「自分には関係ない、自分の住んでいる場所には災害は来ないと思っていた」という言葉が印象に残っています。この言葉を自分自身の戒めとし、災害を他人事ではなく、常に「自分自身の問題」として捉えることの重要性を再認識しました。

2つ目は、保育所での活動です。普段は小学生と接する機会が多いため、3歳児との関わりには当初、緊張もありました。しかし、短大生のみなさんや友人たちの助けもあり、楽しく活動することができました。特に、状況に応じてしなやかに対応している短大生の姿を間近で見て、その専門性の高さを改めて実感しました。

今回のスタディツアーを通して、多くの貴重な学びを得ることができました。これからも震災についての理解を深め続け、ここで学んだ教訓を周囲のさまざまな人たちへ伝えていきたいと考えています。

### 【私の一枚】

3日目のバスの車中から撮った写真です。

原子力発電所事故に伴い帰還困難区域となってしまったエリアでは、自分が育ってきた町や生活してきた家を離れなければならない、その現実を思うととても悲しい気持ちになりました。



## 震災学習スタディツアーに参加して

教育学部 子ども教育学科 3年 高取賢太郎

私は今回のスタディツアーに、当初は東北の美味しいものを食べたり、思い出を作ったりできたらよいと思っていました。出発前は「昨年からのような変化があるのか」「短大生の皆さんと打ち解けられるだろうか」といった不安ばかりが頭を占めていたのが正直なところでした。しかし、日程を重ね、短大生や被災された方々と接するうちに、そうした個人的な不安は薄れていき、真摯に「災害」というものに向き合い、考えることができました。



閑上わかばこども園を訪問した際は、元気いっぱいな子どもたちと触れ合うことができました。子どもたちと関わる中で、被災した場所がこれほどまでに復興を遂げるために、どれほどの努力が積み重ねられてきたのかに思いを馳せました。また、この活動が短大生の皆さんと仲を深める大きなきっかけにもなりました。

佐竹悦子さんや長沼俊幸さんからは、震災当時にご自身が経験された出来事や、先人の教訓が刻まれた石碑のお話など、非常に貴重な講話を伺いました。中でも一番印象に残っているのは、



「自分が住んでいる町を危険だと思って暮らしている人はいない」という言葉です。確かに、東日本大震災や能登半島の災害など、国内で起きている大災害であるにもかかわらず、どこか他人事のように捉えていた自分がいたことに気づかされました。今回お話を伺ったことで、災害を自分自身の問題として真剣に考えようと思えるようになりました。

「学び舎ゆめの森」の南郷市兵校長・園長からは、地域住民との関わり方や「育てる」という教育の根本について学ぶことができました。また、新たな教育の可能性や施設の運用方法など、現在の一般的な教育現場ではまだ十分に活用されていない先進的な教育技術を見学できたことも大きな収穫です。南郷先生の「私たちが取り組んでいる教育プログラムは、この場所だからできるというわけではない」という言葉には、教育に携わる者として非常に共感しました。

### 〔私の一枚〕

2月6日の夜に、皆さんにおすすめされた「せり鍋」を食べに行ったときの写真です。今、落ち着いて温かいご飯を食べられることがどれだけ幸せなことを、スタディツアーに参加すると考えることができます。来年も参加し、今の小さい幸せをかみしめられるようにしたいです。



## 震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 3年 高橋祐哉

今回の震災学習スタディツアーでは、佐竹悦子さんのお話を伺いました。その中で特に心に残っているのは、保育施設の職員と園児、そして保護者の方々の関わりについてです。災害に見舞われ、職員自身も恐怖や不安を抱えているはずの状況で、それが園児に伝染しないよう明るく声をかけ、寄り添い続けた姿勢に深い感銘を受けました。また、自分の子どもをすぐに迎えに行けない保護者の方々が、職員の方々と日頃から積み重ねてきた信頼関係があったからこそ、どこかで安心感を抱いて子どもを預けられていたというお話に、保育現場における「信頼」の重さを実感しました。「マニュアル遵守がすべてではなく、最悪の事態を想定して命を第一優先に避難する」という言葉は、私の心に強く刻まれています。



また、大熊町立「学び舎ゆめの森」の教育方針も非常に印象的でした。この学校では、子どもたちが何かに熱中できることや、好きなものを見つけられるよう、独自のカリキュラムが時間割に組み込まれています。一人ひとりの興味関心を大切にすることの方針は、教育を志す者として非常に興味深く、



学びの多いものでした。

今回初めてこのツアーに参加し、震災当時の切実なお話を伺いました。震災が起きたとき、私はまだ幼稚園生でしたが、地面が激しく揺れ、車や物が大きく揺れていた記憶は鮮明に残っています。幸い私の周りでは津波などの二次災害がなかったため、これまではどこか「津波という災害がある」という知識としての認識に留まっていた。しかし、今回、涙ながらに語られる当時の状況に触れ、私の認識は大きく変わりました。「何かあってからでは遅い」という強い危機感を抱くと同時に、経験のなさから生まれていた「他人事」という意識が払拭されたと感じています。

私は小学校教員を志望しています。将来、教員となった際には、子どもたちに震災の恐ろしさをただ説明して終わらせるのではなく、彼らが自分のこととして捉えられるように伝えていきたいです。そのためにも、これからも学びを深め続け、命を守れる教師を目指していきたいと考えています。

### 〔私の一枚〕

2月4日に訪問した、閑上わかばこども園での写真です。私たち敬愛大学生と敬愛短大生18人で手遊びやパネルシアターをしている様子が写っています。

最初は緊張していましたが、子供たちから明るく接してくれたためほぐれ、楽しい空間、雰囲気を作ることが出来ました。



## 震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 4年 城之内妃奈乃

今回の震災学習スタディツアーで、私は「視野を広く持つこと」の大切さを実感しました。特に以下の二つの経験が、私の考えを大きく深めてくれました。

一つ目は、子どもたちとの関わりです。「閑上わかばこども園」や「学び舎ゆめの森」で、パネルシアターや遊び、会話を通して子どもたちと触れ合い、彼らがのびのびと過ごしている姿が強く印象に残りました。子どもたちが暮らす地域や周囲の大人たちは、それぞれ震災の過酷な体験を抱えています。中には、子ども自身が辛い背景を持って今を過ごしている場合もあるでしょう。出会うすべての人、すべての地域に、それぞれの背景や想いがあります。短時間の交流だけでは見えないことも多いからこそ、一人ひとりに真摯に向き合い、その子に合った指導や必要な補助を行うための「広い視野」を持つ重要性を改めて感じました。



二つ目は、閑上で震災を体験された方々からのお話です。佐竹悦子さんからは多くのお話を伺いましたが、「自分には本当に行動できるのか」、「教育者としてできる最善はなにか」と考えさせられました。その後、昼食をとった「かわまちてらす閑上」の寿司店の大将から、当時お子さんを閑上保育所に預けていたと



いうお話を伺いました。大将は、「保育所が張り紙をしてすぐに避難させてくれたから、子どもも自分も今生きているんだ」と感謝を込めて語ってくださいました。

災害時、保護者は子どもを迎えに行くために、あるいは「学校なら、幼稚園や保育所なら安全だろう」という信頼のもとに教育現場へ集まります。その際、教育現場が迅速かつ適切な対応をとることで救える命があるということを、改めて実感しました。

今回のツアーに参加し、震災の悲惨さや残酷さを改めて感じ、備えの重要性を実感するだけでなく、子どもたちがのびのびと楽しそうに過ごす姿を間近で見て、「子供達を守るために必要な備え」について深く考えるきっかけを得られました。単に「命を守る」という結果だけでなく、学校内で子どもや地域の人々の安心感に繋がる備えを考え抜くことが、教育者としての使命なのだと感じています。

### 【私の一枚】

震災前に閑上中学校があった場所に設置されている、震災瓦礫で作られたモニュメントです。初めて訪れた3年前、カビや泥で汚れているこのモニュメントを見て、胸が痛くなりました。その後清掃・整備され、今は綺麗に保たれていました。

当時この場所で学んでいる子供たちがいたこと、震災前にも多くの方々の生活があったこと、そして「あの日のこと」を、私たちは忘れてはならないと改めて感じます。



## 震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 4年 田端温人

今回の震災学習スタディツアーでは、昨年とはまた異なる視点から多くの学びを得ることができました。今年は短大生の皆さんも加わり、これまでにない貴重な経験を積むことができましたので、その内容を報告します。

1つ目の経験は、閑上保育所での活動です。これまで小学生と触れ合う機会はありましたが、未就学児と関わる経験は少なかつたため、私にとって非常に新鮮な時間となりました。私は「幸せなら手をたたこう」の手遊びの実演を担当しましたが、子どもたちと一緒に歌うのはとても楽しく、その可愛らしさに心が温まりました。急遽、一緒に前に出てくれた後輩たちには心から感謝しています。短大の先生方に「まずは自分が一緒に楽しむことが大事」と教えていただいたおかげで、緊張せずに子どもたちと心を通わせることができました。これから未就学児と関わる際には、まず自分が楽しみ、その楽しさが子どもたちに自然と伝わるような関わり方を大切にしていこうと思います。



2つ目の学びは、「ゆりあげかもめ」代表の佐竹悦子さんのお話です。震災当日、保育現場でどのような出来事があったのか、生の声を聞くことができました。特にお話の中で心に残ったのは、「マニュアルは必要だが、あっても常に疑いを持つべきである」という言葉です。マニュアルがあると人は安心して頼り切ってしまうますが、そこに疑問を持ち、更新し続けることで、いざという時に迷わず行動できるのだと強く感じました。

また、最も感銘を受けたのは、被災後の避難所という過酷な状況下でも、子どもたちが一人も泣かずに過ごせたというお話です。これは、佐竹さんの「平常保育です」という言葉に応え、子どもたちを不安にさせまいと、安心できる環境を作り続けた先生方の対応の素晴らしさによるものだと思います。日常と変わらない雰囲気を作り出すことで、子どもたちの心を守り抜いたその姿勢に圧倒されました。私も将来、子どもたちを守る立場として、どんな時でも子どもに安心感を与えられるよう努力し、常に「いつも通り」を維持できる強さを身につけたいと考えています。

### 〔私の一枚〕

今回一緒に参加してくれた4年生の写真です。今回4年生は5人参加の予定でしたが、様々な事情で2人だけになってしまいました。そんな中で有意義にすごせたのは、彼女のおかげと言っても過言ではありません。共に学び、共に飲み食いできたことはとても良い思い出となった。

今年参加できたのも、他の4人の4年生の誘いがきっかけです。声をかけてくれる友人の存在はとても有難く、忘れられないものとなりました。





## 【引率者から】震災の記憶と現在の生活につながる「希望」

現代子ども学科 教授 清水一巳

今回の学習ツアーでは、「出会い」と「つながり」という学びの本質を改めて実感しました。こども園・保育所での子どもとの出会い、そして「ゆりあげかもめ」代表の佐竹氏と「閑上の記憶」の長沼氏の語りを通して、震災当時の現地の経験と思いに触れることができました。

地震と津波という極限状況における人の行動は力強さをもつ一方、自己防衛が周囲との断絶を生む側面もあることを学びました。その中で子どもに寄り添い安心の場を築いてこられた佐竹氏の使命感には深く心を打たれました。また、語られる子どもの姿には「希望」という力がありました。車内や避難所で保育者に身を委ね静かに過ごす姿は、大人の養護行為を支え、生活を安定へ導く協調的な力として捉えることができます。さらに、避難所での卒園式も、子どもの成長を集団内で祝福し、共有するという意味をもちます。子どもの成長（存在）が、避難所生活をおくった方々にも「希望」として共有されたのではないのでしょうか。



佐竹氏の講話の後に訪れた日和山から閑上の風景を眺めながら、希望の重みを感じました。福島県双葉郡では、立ち入り規制区域と新たなまちづくりの対比から、原発事故の影響がいまなお続く現実を実感しました。制限のある環境の中で、大熊町に縁のある方と移住者が新たな生活を築いています。学び舎ゆめの森では、子どもの自由さや創造性を尊重する学校の枠を超えた学びが実践され、ここでも子どもの成長が「希望」として共有されていました。

このような災害という困難を契機に、まちづくりや新しい生活を築いておられる方々との「出会い」は、私にとってのみならず、参加した学生にとっても大きな学びとなっていると感じます。これらの学びの経験を、保育・教育の領域にとどめることなく、さまざまな日常生活とつなげ、子どものもつ力（希望）を生かすことのできる社会（こどもまんなか社会）へと近づいていくことを願っています。

### 【私の一枚】

2月5日に訪れた日和山の狛犬。震災後に他の神社より移設されたそうです。震災、津波以前から残る、天候や出漁を見守るための山。その狛犬には、お茶とお花がお供えされていました。天と地（海）、過去と現在をつなげる場としての日和山に、生活が息づいています。



## 【引率者から】伝えることの難しさ

現代子ども学科 専任講師 酒井基宏

保育所の保育の基本方針を定めた保育所保育指針には、次の一節が記されています。「子どもの主体的な活動を促すためには（中略）豊かな体験が得られるよう援助すること」。発達段階にある子どもたちにとって体験は、自ら考え、選択し、行動する力を育む大切な機会となります。つまり、どんなことも体験から学んでいくのですが、戦争と災害だけは、そうであってはなりません。体験してからでは遅く、だからこそ、体験していなくても得られるものが必要であり、それが「伝える」という今回の活動そのものだと言えるのではないのでしょうか。



2日目にお話を伺った、元名取市閑上保育所所長の佐竹悦子先生の語りは、東日本大震災当時、現役の保育士であった私の記憶に大変訴えるものでありました。津波の被害こそありませんでしたが、勤務していた保育所も震度5弱を観測し、揺れが続く中、必死になって保育を続けていたことは今でもよく覚えています。保育者人生の中でも印象深い出来事であったわけですから、お話を伺いながら、あのときの自身の行動は簡単に思い返せると思っていたのですが、これがなんとも思い出せないのです。記憶は断片的であり、あれだけ強烈な体験をしていたにもかかわらず、自信を持って話せなくなっていることに驚きと怖さを感じました。



改めて「伝える」ことは、とても大変なことだと思います。佐竹先生のお話で、職員との振り返りのエピソードがありました。「私は覚えていなかったのですが、職員から園長先生が〇〇と言っていました」というものです。記憶はだんだんと薄らいでいきます。だからこそ、「伝える」ことで、その記憶が「記録」されていくのだと思います。その上で大事なことは、自分だけの視点で「伝える」のではなく、共に誰かと「伝え合う」ことで、体験に変わる学びへと繋がっていくのではないのでしょうか。そんなことを、私自身も今回のスタディツアーから学ばせていただきました。

## 【私の一枚】

短大生、大学生とともに、子どもたちとの関係づくりの橋渡しに、パネルシアターをとりいれられたことは、教員としても嬉しい活動でありました。ぜひ今後も、活用してくれたら嬉しいです。子どもたち以上に、皆さん、いい顔していましたよ。ありがとうございました。



## 震災学習スタディツアー2025 参加者

### (敬愛大学 参加学生)

経済学部 経済学科	2年	加藤 羅偉	竹田 百花
	3年	稲村 優希	芳賀 寿也
国際学部 国際学科	3年	佐伯 桃子	松島 奈津葵
		松原 にな	安山 ひとみ
教育学部 こども教育学科	2年	池田 悠夏	丹所 紗英
		鶴岡 正美	寺山 ほのか
	3年	斉田 直大	櫻井 友駿
	4年	高取 賢太郎	高橋 祐哉
	城之内 妃奈乃	田端 温人	

### (敬愛短期大学 参加学生)

現代子ども学科	2年	岩瀬 まどか	佐藤 綺蘭
		勝瑞 花歩	田野倉 彩也菜
		長井 優月	中原 未結
		廣沢 歩夢	藤森 悠美
		本澤 七海	

### (引率教職員)

現代子ども学科	教授	清水 一巳
	専任講師	酒井 基宏
地域連携センター	センター長	藤森 孝幸

---

## 敬愛大学・敬愛短期大学 震災学習スタディツアー2025

### 活動報告書

令和8年3月11日 発行

発行人 藤森孝幸

発行所 敬愛大学・敬愛短期大学 地域連携センター

〒263-8588 千葉県千葉市稲毛区穴川1-5-21

メール [crc@u-keiai.ac.jp](mailto:crc@u-keiai.ac.jp)

電話 043-251-6364(直)



今年度参加した学生たち。名取市閑上の伝承施設「閑上の記憶」で、長沼俊幸さん、丹野祐子さん、渡邊成一さん、佐藤幸弘さん、尚絅学院大学ボランティアチームTASKIの学生さんと共に映る学生たちの姿です。

2011年9月の本学の宮城での活動が始まって以来、お世話になってきた閑上のみなさん。語り続けるバトンを受け取った本学の学生たちが、今回のスタディツアーでの学びをこの報告書で綴っています。ぜひじっくりお目通しください。

本学からこれまで参加したのべ400名にも及ぶ学生たちと共に、これからも語り継いでいきましょう。



本冊子には、見やすいユニバーサルデザインフォントを採用しています。